

人生の舵を自ら取り、
不確実性の時代を前向きに生きる

伊藤達也氏

関西学院大学専門職大学院 教授



Itou Tatsuya_1961年生まれ。東京育ち。1984年慶應義塾大学法学部卒業。松下政経塾5期生。1993年衆議院議員に初当選し、2009年まで5期連続当選。内閣府副大臣などを歴任し、2004年小泉内閣にて金融担当大臣就任。不良債権処理に当たる。福田内閣(2008年)では内閣総理大臣補佐官として社会保障問題を担当。現在は関西学院大学専門職大学院教授、PHP研究所特別研究員などを務める。趣味は野球・映画。

CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 泉 彩子、大久保幸夫
Text = 泉 彩子 (52~54P)
大久保幸夫 (55P)
Photo = 刑部友康

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

伊藤達也氏 キャリアストーリー

1961年	0歳	大阪府大阪市に生まれ、東京で育つ。父は会社員。少年時代は野球に夢中だった
		 <p>2歳頃。きかん坊であまりに手に負えないため、厳しい祖母にはお風呂に閉じ込められることも</p>
1977年	16歳	慶應義塾高等学校入学後すぐ、母親がエリテマトーデス（全身の臓器に原因不明の炎症が起きる難病）に倒れる。看病を通し国の医療制度や福祉政策に疑問を抱き、政治に関心を持つ。松下政経塾設立を知り、その理念に感銘を受ける
1980年	18歳	慶應義塾大学法学部入学。同年、母逝去。在学中に松下政経塾の塾生約20名を訪ね、入塾を決意
1984年	22歳	5期生として松下政経塾（全寮制）に入塾。在塾中の1987年、カリフォルニア州立大学へ留学
		 <p>州立大学の恩師や友人たちと</p>
1989年	27歳	松下政経塾卒業。ピザ店の経営で生計を立てる
1993年	32歳	日本新党から出馬し、衆議院初当選。新進党などを経て1998年自民党に入党。橋本派に属した
2004年	42歳	小泉内閣にて内閣府副大臣を経て金融担当大臣に就任。不良債権問題の解決に取り組む
2008年	47歳	福田内閣にて内閣総理大臣補佐官に就任。年金問題など社会保障制度の立て直しに尽力するも、翌年の衆議院議員総選挙で落選
2011年	49歳	大学で教鞭をとるほか、PHP研究所で特別研究員として活動している

伊藤氏は、松下政経塾出身者で初の閣僚となった。第2次小泉内閣では金融担当大臣としてバブル経済後の日本の最大の課題であった不良債権問題の解決に当たり、福田内閣では内閣総理大臣補佐官として財源問題を含めた社会保障制度の改革に取り組んだ。会社員家庭に育ち、母の看病をきっかけに、政治家を目指した。官僚や議員秘書の経験はなく、32歳で衆議院議員に初当選する前は宅配ピザ店を経営していたという経歴もある。

大学卒業後、松下政経塾に入塾 自律的な人生の楽しさを知った

16歳のときに母が不治の病にかかり、3年半の看病生活を体験。国の医療制度や福祉政策に感じた矛盾を自らの手で解決したいと考えたのが政治家としての原点だ。

「病気や死を身近に感じ、限られた人生ならば、人の役に立ちたいという思いが高まりました。ただ、最初は政治家になろうとまでは考えていませんでした。サラリーマンの家庭に生まれ、将来は企業に就職するのが当たり前だと思って育ちましたから」

政治の世界に足を踏み出したのは、故・松下幸之助氏が政財界の次世代リーダーの育成を目指して設立した私塾・松下政経塾との出会いが大きい。

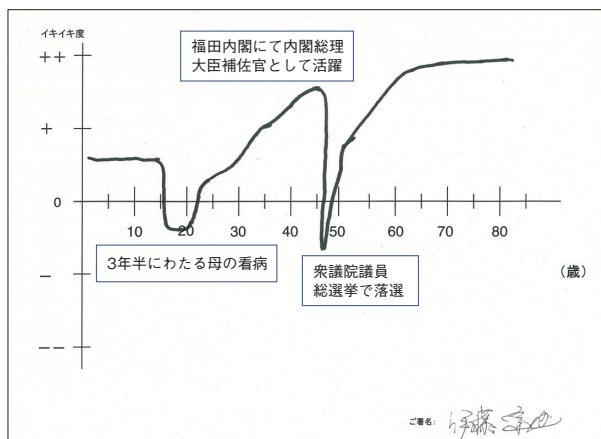
「新しい日本を担う人材をゼロから育てるといふ壮大な構想に共鳴し、そこで自分の力を試したいと思いました。松下電器産業（現パナソニック）創業期の社員だった祖父から、折にふれて幸之助氏の人間的な魅力を聞かされていたことも影響しているかもしれません」

慶應義塾大学法学部卒業と同時に第5期生として松下政経塾に入塾。父親には猛反対された。

「何の後ろ盾もないのに政治家を目指すなんて、狂ったかと（笑）。正直なところ、私も最初は不安でした」

だが、入塾後の伊藤氏は、不確実性の高い人生を楽しむようになったという。

「当時の政経塾の研修期間は5年間で、そのうち3年半は自分の思い通りのテーマを研究することができました。そんなに長期間、好きなことができる機会は滅多にありませんよね。与えられた人生を生きるのではなく、自ら人生をコントロールすることがいかに楽しいか。それを知っただけでも政経塾に行った意味は計り知れません。また、研修を通して出会った企業の方たちに『卒業後は



直筆の人生グラフ。母を亡くして下降し、政治への志が高まるにつれて上昇。2009年の落選で一時的に落ち込んだものの、基本的にはポジティブ思考。

うちに来ないか』と声をかけていただいたことも、社会を歩んでいくための自信につながりました」

若き日のビル・ゲイツたちに会い、 その熱気に魂を揺さぶられた

松下氏からは従来にはない発想を数多く学んだが、とくに大きな影響を受けたのが、「国家の経営」という視点から政治を見ること。そのモデルを探ろうと在塾中には客員研究員として米国・カリフォルニア州に1年間留学。学業のかたわら、同州サクラメント市で市長のカバン持ちをして米国の地方行政の現場を見た。

「米国の自治体は独立性が高く、大きな権限と責任を持っています。そして、日本とは異なり、『税金は1ドルでも安く、行政サービスはより高く』というのが最大の福祉だと考えられている。行政の場でまさに『経営』が行われているのです。帰国後、幸之助氏にこのことを報告したときの何とも言えない笑顔が忘れられません」

米国留学中には若き日のビル・ゲイツやスティーブ・ジョブズなど現在はメガ・ベンチャーに成長した企業の創業者たちに会い、話を聞くという経験もしている。

「当時はニューヨーク株式市場でブラックマンデーと呼ばれる史上最大規模の株価暴落が起きた直後。米国の経済はどん底にありましたが、彼らは逆転の発想で『今こそ俺たちの世代の出番。ベンチャー企業の力で経済を立て直し、新しいアメリカをつくるんだ』とばかりに熱く将来への展望を語ってくれました。しかも、内容にリアリティがあるんです。その熱気に魂を揺さぶられて自らの進むべき道が明確になり、政界挑戦の意思を固めました。彼らのような若者たちを輩出するビジネス環境を整

え、新たな日本の成長の姿をつくるのが私の務め。青年時代から関心を持ち続けてきた社会保障問題も、経済的な豊かさを実現してこそ解決できるというのが、政経塾と米国で学ぶことによって出した結論でした」

松下政経塾卒業後はピザ店を経営し、生計を立てた。「政経塾の仲間は私の行動を不思議に思ったようですが、『政治を志すならば、生活費ぐらい自分で稼ぎなさい』という幸之助氏の教えに従ってのことでした。資金繰りには悩まされましたが、宅配で地域の方たちに顔を覚えていただき、選挙でも応援してもらえました」

国会議員として走り続けた16年間 目標を見失ったことはなかった

1993年に衆議院初当選。松下政経塾と米国留学で養った経済・財政から政治を支えるための見識と自ら開業して培った生活感覚を糧に、中小企業政策や金融政策を立案していった。その仕事ぶりを見ていた竹中平蔵氏の強い要望で2002年に第1次小泉改造内閣の内閣府副大臣（金融担当）に就任。2004年には第2次小泉改造内閣の金融担当大臣に抜擢され、松下政経塾出身者では初の閣僚となった。その後の活躍は既述の通りである。

初出馬時は日本新党に所属していたが、新進党を経て1998年に自民党に入党。政界に入る前は守旧的な政党として敬遠していた自民党に所属することを決めたのは、故・橋本龍太郎氏の影響が大きい。

「橋本先生の国会での真摯なご答弁に感銘を受け、1度こういう政治家のもとで結果の出せる政治を勉強したいと『敵の懐』に飛び込んでみたくです。すると、以前は密室政治と嫌っていた根回しや駆け引きも、政策の実現には必要なことだとわかった。先入観を捨てて、相手の志を理解する大切さを学びました」

初当選から自民党が大敗した2009年衆院総選挙で議席を譲るまで、国会議員としての在職期間は16年間。

「経済と財政の改革で日本を元気にし、安心して暮らせる社会保障制度を実現することを目指し続けました」と伊藤氏。どの役職にあってもこの目標を見失うことはなかった。しかし、まだ道半ばだという。

「東日本大震災が起き、日本の復興に向けて課題は山積みです。どんな立場であっても力を発揮できるよう、今はあらゆる人にお会いして見聞を広めています」



■ 伊藤達也のキャリアをこう見る

松下政経塾の教えと経験から育んだ 不確実性を楽しむキャリア

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

伊藤達也氏のキャリアは波乱万丈である。数年先に何をしているのか、明確ではない状態のなかで常に爆発的なエネルギーを発揮している。なぜか？ それを知りたくて久しぶりに氏を訪ねた。

お話を伺っていて感じたのは、教育心理学の概念「ローカス・オブ・コントロール」でいう内部統制が極めて強いということである。さまざまな出来事が自己の能力や行動の結果だと考えるのが「内部統制」であり、運や環境の問題だと考えるのが「外部統制」であるが、彼の場合は、自分次第だと明確に思っている。これは起業家などに多いタイプで、いい方向に働けば、不確実な社会をポジティブに生きていくことができる。

ではなぜそうなったのか？ もちろん生まれつきそうだったわけではなく、そこには松下政経塾の第5期生として得た教えや経験があったように思う。

政経塾の採用基準には「運と愛嬌」というものがある。これは政治家として大成するにはその2つが欠かせないという意味だと理解していたが、同時に変化対応の心得でもあるのだと伊藤氏の話聞いて思った。愛嬌によって人的ネットワークを広く薄くつくる力を求め、運という言葉で、偶然の機会を最大化するような日常の行動を求めているのではないだろうか。

そして政経塾の五誓になっている「成功の要諦は成功するまで続けたところにある」という

言葉は伊藤氏の座右の銘にもなっていて、これも不確実な環境を生き抜く知恵になっている。

さらに政経塾で、強烈な個性の人々と寝食を共にする経験も。電器店での販売実習で、どうしても生活できなかつたら最後はこれで食えると感じた経験も。松下幸之助氏から最後の報告会で直接高い評価をもらったという成功体験も。すべてが不確実な社会をポジティブに生きる糧になっているのだとわかる。

若いときに受けた教育は重い。それを改めて実感した機会だった。

◆ 伊藤氏のキャリアを支える原点

